

(平成 29 年 9 月 7 日 午前 10 時 45 分)

●議長 (小林幸雄) それでは、会議を再開いたします。

通告の 7 石川広之議員。

1 信濃町のブランドの考えは

議席番号 5 番・石川広之議員。

◆ 5 番 (石川広之) 議席番号 5・石川広之です。通告の、ブランドについてということ  
で、一点でお願いしたいと思います。また、一般質問まで、お願いします。

今年も、収穫の秋となってきました。今年は 6 月の中旬までは気温も高く、順調な生育をしていた農産物も、7 月に入り、雨も多く、農業者にはとても辛い天候でした。思うような作付けもできず、また、管理作業にも大変な苦勞をしたのではないのでしょうか。信濃町で有名なソバの種まきの時期になっても雨天が多く、適期に種まきの作業ができたかどうか、考えさせられる天候でした。それでも、信濃町もソバの花が白く咲く頃になりました。ここまでは、昨年と同じく見事に花が咲きました。昨年は、これ以降、天候があまり良くなく、不稔となり、不作となりましたが、今年はこれからの温度、日照不足の影響がないように願うばかりです。

水稻作況状況が、先週、農水省より発表がありました。東日本を中心にした地帯の作柄は「平年並み」、又は「やや良」とし、概ね天候に恵まれたのではないのでしょうか。また、西日本も同様な作柄で推移をする、としました。北陸農政局と関東農政局は、「長野県は、生育期間を通じて概ね天候に恵まれ、平年並みの見込み」としているが、当町での作況の捉え方は、違うのではないのでしょうか。今までこの 9 月の一般質問では「新米を食べてきました」と毎年言っていました。さすがに今年はまだ、もう 1 週間かかるかなということで、これ、実感として、作況は去年とはまた違うのではないのか、というのがあれです。まあ、これからの天候において期待をするということで、順調に進んでいただきたいと思います。これは、本当に先ほどのソバと同様、願うばかりです。

今年の米価の動きは、米の数量を見ないと、生産者、卸業者、消費者と、動きのつかめない年になるのではないかということです。さて、農水省は、平成 30 年度予算の概算を、財務省に提出しました。これによると、構造改革の推進に向け、農業農村整備事業、また、農地中間管理機構が、借り受けた農地を農家の費用ゼロで基盤整備をする事業を新たに始め、担い手の農地集積を加速させ、また担い手への経営支援の目玉として、2018 年 1 月より始まる、青色申告実施農家を対象に、経営体の収入減を穴埋めする収入保険制度を始めるようになっていきます。また、18 年から、国が生産数量の目標の配分をやめ、国は、ナラシ対策の要件に引き続き、需要調整を求めるのは困難としている。大変難しい問題と受け止めています。これからも、今日ここで、農業政策の話をしました。が、良し悪し、いろいろ別として、なかなか農業政策をしようとする人が大分減ってき

ているのではないのでしょうか。

さて、信濃町として、ブランドはどのように考えているかということで、私の通告としましたので、当町では普通に生活の中にあるものが、考え方一つで、ブランドとして売り出している自治体もあります。生活の中にあるこんなもの、こんなことが、良いブランドとして出せる取組は、どのように考えますか。信濃町のブランドの考えと、このような取組を、町はどのように考えるか、お願いします。

●議長（小林幸雄） 横川町長。

■町長（横川正知） 信濃町の農業、農産物等のブランド化についてということで、ご質問でございます。私も前段、今年度の農作物の作況について心配をしておりますが、ほぼ今のところ平年並みというような、今、石川議員さんからもお話がありました。今後の収穫まで、順調な生育を願っているものでございます。

さて今、ブランド化ということでございますが、要は、ブランド化、何て言いますか、そのものが、独自の価値を持つ、あるいは、経済的に言えば、そのことが収益力のアップ、あるいは、経済的な効果、こういうことがブランド化というものの、求める部分だろうと思っております。

そこで、信濃町につきましては、長期振興計画において、町のブランド化可能な農産物を、六次産業化事業に取り組む地域と共にプロデュースしていく目標を掲げまして、そのために必要な生産基盤の整備を進めるというふうにしているわけでございます。また、地域資源の商品化に向けた取組の推進として、関係機関、関係団体と連携しながら、宣伝及び販売ルート拡大などに関する取組を進める、こういう計画の中で、進めているわけでございます。

農産物のブランド化も、それぞれ農産物の品目によって、取組の内容が違ってくるかなというふうに思います。その中で、やはり、消費者が相手でありますので、品質や食味の高さを売りに、販売ルートを確保していく、当然、町の取組だけではできないわけでございます。関係する農協や、あるいは直売所の道の駅、生産者と、一体的に進めないと、このことが、うまく機能していかないと思っております。引き続いて、一般的に言えば、トウモロコシは、やっぱり信濃町だというふうに言われている、これもある面では、一つはそれぞれ生産者、関係機関等々が一体となって、進めてきている結果としての、ある意味、ブランド化になりつつあるのかなというふうに思っていますし、このようなことが、ソバを含めて、それぞれ信濃町の地場産品のブランド化というものについては、今後も、進めていかなければいけないというふうに思っております。以上でございます。

●議長（小林幸雄） 石川議員。

◆5 番（石川広之） 信濃町のブランドへの取組ということで、町も、生産者、あるいは

その販売業者と、いろいろ協議をし、ということで、はい、分かりました。

その中で、信濃町には農産物、工芸製品、自然など、本当にブランドとなり得る物、あるいは資源が、たくさんあるのではないのでしょうか。町長が言う、町には本物があり、本物でできています。ここ数年間に、農産物ではルバーブが、富士見町でブランド化され、年間6千万円以上の売上になり、加工をし、また東京などへの出店を、力を入れて努力をしているようです。ルバーブは、戦前から信濃町独自の物だと、皆思ってきましたが、これ本当に、だが、そのように思ってきたのですが、当町で、苗の確保をし、富士見町では、ブランド化したという、本当に、自分たちが、普通に生活の中にあるものが、見えているのか見えていないのか、また周りではそれが見えて、ブランド化されているというのが、今、現状ではないのでしょうか。

ポタゴシヨウか、コシヨウもそうです。隣の市でも商標登録されたり、また、それに合わせて、「やたら」の地域おこし、ブランド化みたいなことを考えたり、また隣の町では、「やたら」を飲食店がそれぞれメニューとし、独自の物を作り、それぞれ飲食店の誘客に力を入れ、それをまた行政がタイアップし、力を入れています。これも本当に普段、毎日のように生活の中にある物が、当町ではそういうふうには考えなかったけれども、違った市町村から見れば、普通にある物がブランド化されて、そこで打ち出されたというか、本当に、これを見ても、信濃町の取組、これから考えるのではなくて、よその自治体、よそのそういう生産者からすれば、信濃町は、なんて大変、宝を持っている所だというふうに思えるんです。

そういうことで、もう一度、このようなブランドへの取組が、町として、市町村として、どう違うのか、ちょっとお聞かせいただければと思います。

●議長（小林幸雄） 小林産業観光課長。

■産業観光課長（小林義之） やはり、ブランド化という部分につきましては、差別化を図るという部分でございます。また、そういう中で、やはり生産者との関わりが非常に強くなってきておりますので、安定した大量生産ができますとか、安定した品質の確保、栽培の方法、そういうものの基準なども作っていかねばいけないうふうに思っております。

中野市で、新聞報道にもありましたけれども、ポタゴシヨウを、中野市独自で原産地の呼称管理制度というものを設ける中で、栽培の基準などもやっているのも、その一つだとは思いますが、今現在町の方で、そこまで進めているような状況ではございませんけれども、やはり生産者との絡みもございますので、その辺については、生産者が大量生産というか、そういう安定した供給ができるような状況まで、もっていかなくてはならないものだというふうに考えております。

そんなこともありまして、生産者の関係との絡みも含める中で、町としても、今後検討はしていきたいというふうに思っております。

●議長（小林幸雄） 石川議員。

◆5 番（石川広之） 町の取組とすれば、これから考えたい、考えています、また、それぞれで今、取り組んでいるものを、延長上の中で充実していく、というように、うかがえますけれども、これ本当に、信濃町に普通にある物が、よそではブランド化されて、一つの商品として、目玉として動いている、これが現実だと思います。その中で、いつまでも「考えます」、あるいは「検討します」、ではちょっと遅い、また遅きに、ということだと思います。また是非、その辺も、それぞれ行政、あるいは、そこを推進するところだけでは、太刀打ちはできないと思うんですけれども、是非、そのいろいろなものに関してブランド化、あるいは、ブランドとして認識をして進んでいければいいと思います。

町も、ぶんぶく亭、あるいは天望館等、加工品の開発と販売をいろいろ手伝ってきました。その中で、町内外にも大変有名になって、集客もできると思います。町内でも平成に入って、全国的に有名になったそばを、玄そばで販売する一次産品ではなく、今言う六次産業に取り組み、それで、当初は苦労したでしょうが、今の経営につなげているそれぞれのそば屋さん何件かあります。平成の 5、6 年頃、そば屋を立ち上げた皆さん、それぞれしっかりと営業をやって、信濃町のソバを有名にさせていただいているとは思いますが。

そのようなことも、また、信濃町ではモロコシも、昭和からの長い期間を通し、当町の季節の顔として、国道沿いが一番最初でしたか、焼きモロコシなど、時季を通して野菜と一緒に販売をしてきました。ここ近年、特に、昭和 50 年以降、信濃信州新線、通称・戸隠街道、又は、この頃では「もろこし街道」として大変有名になりました。町内外、全国的にも有名となり、もろこし街道が、モロコシの販売をするということも、一つのブランド化として、名勝となっているのではないのでしょうか。

ブルーベリーも、当町での歴史も長く、栽培の歴史も長く、全国サミットを開催するなど、生産者の力が関わっています。以後の効果は、またどうでしょうかというところ です。

これらは一部ですが、町民がブランドとして営業しているもの、こういう取組に対して、町はどのように考えていますか。お願いします。

●議長（小林幸雄） 小林産業観光課長。

■産業観光課長（小林義之） ブランドにつきましては、生産者は、信濃町の特産品ということで、ブランドとして使っていただいているということで、本当に信濃町の PR、町におきましても、それらのポスター、パネルなども作る中で、販路の拡大ということで、各地のデパートですとか、そういうような商談会ですとか、そういうようなものにもご利用させていただきまして、本当に生産者の皆さんの努力の賜物の部分もあるかと思っておりますので、引き続き町としても、そういう部分につきましては、支援をしていきたいというふうに思っております。

●議長（小林幸雄） 石川議員。

◆5 番（石川広之） 町としても、それぞれブランドという言葉は、なかなかどうやって使っているのかということ、私も難しいものがあつたり、これは、農産物ばかりではないと思いますので、その辺もまた、お聞きします。

町で、ずっと長い間、主な農業として稲作、酪農が主たるものとしてありました。これらは生産、販売、流通など、関係する機関が関わっています。それには、同じブランドという方向性はあるにしても、そのブランドの取り組み方が違うのではないかと、またその稲作、酪農に関しても、町としての考え方も異なるのかなど、その辺のところをお聞かせください。

●議長（小林幸雄） 小林産業観光課長。

■産業観光課長（小林義之） 各農産物につきましては、お米につきましては、町としましても、アキタコマチを「朝米」、また、コシヒカリを「夜米」というような形での贈答用での販売もしてきたところであります。

また、昨年につきましては、町内の米のコンテストなども実施をして、コシヒカリ部門、アキタコマチ部門に分けて、食味のコンテストの実施をしまして、金賞米を特別パッケージでPR販売も行ったところであります。今年度につきましては、道の駅に地場産品の直売所の建設に合わせまして、お米の食味計も導入することとしておりますので、農家の皆さんのお米の品質、出来栄なども確認できるような形としております。

また、農協におきましては、化学肥料や農薬の使用を減らした特別栽培米などを、環境にやさしい農産物の認証を受けて販売をしているところであります。

ソバにつきましては、「霧下そば」ということで、パネルなども町で作成する中で紹介をしているところでございます。

また、モロコシにつきましては、先ほどもありましたように「もろこし街道」というような形での直売所や、また、道の駅での直売所でも大変好評を得ておりまして、信濃町のブランドとして定着をしているところであります。また、農業の生産法人ですとか、集落営農組織、また農産物の出荷協議会等においても、独自に販路を形成しておりまして、モロコシのブランドということで、販路の開拓を進めておりますので、非常にブランドとして好評をいただいているところであります。

また、ブルーベリーにつきましては、今、ブルーベリーの栽培の協議会が主体となっております。安定した品質の確保に努めるとともに、長野市内のホテルとの直接商談なども実施をしております。2月には、長野市との連携中枢都市圏協定に基づきまして、地産地消の商談会への参加も予定をしているところであります。

また、ポタゴショウにつきましては、道の駅の出荷農家を対象にしまして、今年から目揃い会なども実施をして、品質の確保、また統一を図っているところであります。

また、ルバーブにつきましては、道の駅での販売が主なものでございますけれども、販売、ジャムの加工につきましては、町内、また町外でも、加工販売が進められている

ところでございます。以上です。

●議長（小林幸雄） 石川議員。

◆5 番（石川広之） 質問者も農業者です。返ってくる話も農業関係、農産物の話が多いと思いますけれども、信濃町、農産物ではなく、また、いろいろなものがブランド化できるのではないかと思います。土地の名前、名称、またイベントなど、ブランド化できるものがたくさんあるのではないかと。

町では年間、7 千万余の広告・宣伝費をかけています。町としても、ブランドという考えでの、町外への発信はどうでしょうかということで、それとトライアスロン、トレイルラン、大学駅伝、これらは本当に、皆さんが来ていただいて、町が発信できるものであって、今、それぞれのもの、イベントですか、これらもそういうもので、一つのブランドとして扱ってもいいのではないかと思います。また、農家が都会の子供を受け入れる民泊など、信濃町独自、あるいは他市町村に誇れるようなものだと思います。これらもひとつブランドという考えを持てるかどうかをお伺いします。

●議長（小林幸雄） 横川町長。

■町長（横川正知） 広範囲でブランドをというようなことでのご質問と言いますか、ご提言も含めての話だというふうに思います。

先ほど、石川議員さんも言われましたけれども、私、まさに信濃町、本物の町、これは本当に自然、黒姫山にしても斑尾にしても、また野尻湖にしても、そのこと自体はもう、文化的に言えば、一茶も博物館もいわゆる童話館も、このこと自体をもって一つはブランドだというふうに思っているんです。先ほどの個々の農産物も含め、あるいは今言った広義の自然環境も含めて、このことをどう情報発信として、発信力を持つかということが、非常にブランドというものの価値を高めていくと言いますか、そういうことに、つながってくるんじゃないかと思うんです。

先ほど、ルバーブの話もありました。どうもやっぱり、信濃町の中で、歴史と言いますか、取組は、やっているけれども、そのことの後のことが、なかなかうまく結び付いていかないというような状況も、私のちょっと職員時代も含めて反省をしているわけでございます。そういうことからしますと、必要な情報というのは、しっかりと広く情報発信をしていくということが、大変重要なことじゃないかなと思うんですね。

そういう意味では、まさに、前回もちょっと言いましたけれども、観光地としても、生き様、町民の皆さんが生きている姿も観光というふうに、私は捉えているんです。そこに、生きている文化、それらも含めて、一般的に言われている、先ほどの拠点としての観光地というよりも、そのことも含めて、全て丸ごと観光地という捉え方をしているわけでございますので、そういったことが、全体的な信濃町のブランドとして、個々のブランドも含めて、どう情報発信としてできていくか、これ、これからの大きな課題かなというふうに思っていますし、そんな努力も、個々の商品も含めて、取り組んでいく

必要があるかなというふうに思っています。

●議長（小林幸雄） 石川議員。

◆5 番（石川広之） 今後の取組というふうにお伺いしましたけれども、「今後」は、もうすぐ明日にでも、ということで、また是非、お考えをお願いしたいと思います。

今、町長もちょっと触れられました、通告の中にもありましたけれども、町の施設である童話館、ナウマンゾウ博物館、一茶記念館など、信濃町では、信濃町で、当町では、なくてはならない、信濃町だからこそ、という施設です。これも、当町、町でいう本物です。去年は、入館者の減少などということがありました。その中でも、この三館、ブランドという思いはあるのかなと。それと、私は議員の中では総務産業という、所管がちよっと違う、見る方向性では、観光施設になってしまいます。その中でもこの三館のブランドというのは、どうですか、という聞き方も、なかなか難しいものがあるかなと思いますけれど、教育長、お願いします。

●議長（小林幸雄） 竹内教育長。

■教育長（竹内康則） 先ほどにおきましては、町の主要な農産物に関わるブランド化ということでお尋ねございまして、長の方から、衣食住、自然、農業、観光、全て含めて、本物の信濃町というブランドと、こうこう方向を施行したいというお話がございました。今、お話の、文化教育施設を担当いたします教育委員会といたしましては、まさに自然、農業、観光、衣食住を含めて全体との調和の中で、施設三館のブランド化というものを目指す必要があるだろうと。

それにしましても、ブランド化ということは、先ほどもお話がありましたように、差別化と経済の優位性ということだろうというふうに考えますと、これまでの取組を、ここで検証いたしまして、やはり、施設そのものがキラリと光るものでなければならない、加えて、そのキラリと光るものが軸になり、点から線、線から面と、こういう展開で、私どもが所管いたします文化教育施設が、この地域において、なくてはならないもの、さらには、全国的にもブランドとして発信ができるものと、そういう取組を引き続きやる必要があるだろうと。

今、議員さんが指摘されておられましたけれども、昨今、この三館の入館者数が、全盛の時期と比較しますと、相当減ってきております。これがやはり、ひいては町の一般財源そのものを圧迫していると、これにつながるわけでございます。そういう現状を、しっかりと受け止めまして、これからの差別化、経済の優位性、この二つを、難しい課題ではあるんですけども、三館の連携の中で、さらには、先ほどお話がございましたように、ただ施設ということだけでなく、この地、この自然、ここにおける観光、農業、全ての関係する皆さんと連携する中で、とりわけこの町に住む町民の皆さんの協同の中で、そうした方向をこれから鋭意模索したいと、こんなふうに実は思っております。特に、町民の皆さんと協働という考え方を、前面に打ち出しながら、ただただ、その施設

における従業員、職員が頑張るということではなくて、多くの地域の皆さん、関連する、関係する皆さんとの協働作業の中で、このキラリと光る何かを求めたいと、こんなふう  
に思っているわけでありませう。

本年度、そんな視点での取組を、次長の方から三館にわたって、ちょっとお話をさせて  
いただきたいというふうに思っています。以上です。

●議長（小林幸雄） 佐藤教育次長。

■教育次長（佐藤巳希夫） 三館の取組ということで、若干ご説明をさせていただければ  
と思います。

まず、ナウマンゾウ博物館につきましてですけれども、本年度、文化庁の補助事業を  
活用する中で、実行委員会を立ち上げまして、先般、町内事業者を中心にナウマンゾウ  
の歯のレプリカ作りを行いまして、制作したレプリカを事業者の店舗、それから宿泊施  
設と、23 か所に置いてもらうというような取組を行っております。

また、一茶記念館につきましては、文化庁の補助金の活用を行いまして、住民の皆様  
によるワークショップ、それからワークショップでのガイドマップ作り、それからバス  
ツアーなどを計画、実行したところでございます。またそのほかに、投句箱の新設等も  
40 個ほど、計画をしているところでございます。

童話館につきましては、本年度、夏の企画展ということで、「11 ぴきのねこと馬場の  
ぼるの世界展」ということで、現在、企画展を行っているところです。こちらにつきま  
しても、企画展につきましては、現在順調な入館者の推移があるということでございま  
す。

以上、三館の状況でございますが、よろしくお願ひしたいと思ひます。

●議長（小林幸雄） 石川議員。

◆5 番（石川広之） 信濃町、教育施設というか、三館、今年取組ということで、それ  
ぞれお聞かせいただきました。また是非、観光で来られる、また、施設を見て見聞を広  
げる方に、魅力のあるものにしていきたい、また、皆さん、ここにいる人、町民が全  
て参加できるものであってほしいと思ひます。よろしくお願ひします。

この町の自然、これも一つの、信濃町だからこそ、信濃町の景色であったり、環境で  
あったり、いろいろなものですよ。これも他市町村、他自治体で、決してこれがあるも  
のではありませぬ。これも一つブランドとして、普通に言ひて、信濃町で誇れるもの  
というふうに言ひのかなと思ひますけれども、そうじゃなく、これも一つのブランド  
として、売り出せる、あるいは、その位置付けをして、ブランドという言葉の大いに使  
って、PRを発信できればと思ひますけれども、その辺はどうですか。例を、例えて  
でもいいですから、野尻湖とか、というところで話をいただければと思ひます。

●議長（小林幸雄） 小林産業観光課長。



■産業観光課長(小林義之) 野尻湖や黒姫山を始め、多くの自然景観が当町の魅力であります。その中で、森林という部分では、自然を生かしたブランド化事業として代表的なものとしましては、癒しの森事業がございます。平成 15 年から取り組んでおりますけれども、この事業につきましては、医師と連携をして、科学的な根拠に基づき、森林セラピーを事業化して、今現在、日本のトップランナーとして取り組んできた実績がございます。32 の企業と提携を組む中で、企業研修等でも当町をご利用いただいております。また、癒しの森という言葉そのものを、商標登録をしているところでございまして、そんなことでブランド力として、今一番としては、癒しの森事業を進めているところでございます。

●議長(小林幸雄) 石川議員。

◆5 番(石川広之) 信濃町の自然環境、また自然も一つのブランド、あるいは、そこに訪れていただける方、ブランドという意識をしていただければ、本当に町も、一つの考え方の中で、観光施設じゃなくて、一つのブランドとして取り扱っていただいたり、また、来町者も、一つ訳ありのものを観光しに来るといふ、そんな世界も、是非是非育てていってください。

その中で、ちょっと、ざっくばらんな話ですけども、黒姫山で、大変有名な春の山菜、根曲がり竹、タケノコです。これも、黒姫山にあるから、なかなか難しいものであるから、これを、どうですか、荒廃地、雄大な農地を活用して、ブランド化してみてもどうですか。それには、山菜、いろいろありますね。ワラビ、ゼンマイ、テンジョツパ、ウドなど、いろいろありますけれども、どうですか。

●議長(小林幸雄) 横川町長。

■町長(横川正知) これ決して、変な提案じゃなくて、立派なご提案をいただいているなど、私、思うんですね。少なくとも、農産物も含めて、これだけ気候変動が出てきて、温暖化というような状況が出てきているわけですよ。私は、県の農業改良普及所の会議もあった時に、その辺に対応できる、新たな、それぞれの地域における適作物というのを、県としてと言いますか、研究していく必要があるのじゃないかということをおっしゃったのですが、それはそれとして、今、山にあるものを里に下ろして、そして、ブランド化的なことで活用したらどうかと、こういうことかと思うんですが。

どうでしょうか、実際には、根曲がり竹や何かも下に下ろして、そして、空き地と言いますか、植えて、採取するというようなことが、実際には、やっておられる皆さん方も何件か、私は承知をしております。これが本当に、そのことをもって業としてやる時に、収益力の問題だとかというのは果たしてどういうふうなるのかな、そしてまた、いわゆる、農地という部分で、本当に有効活用的になるのかということもあると思うんですが、なかなか、これ町として今、そういうふうに進めるという、今すぐにどうのこう

のというのは、ちょっと難しいかなと思うんですが、ブランドと言いますか、個別化、差別化というようなことの中では、あるものを、どう有効に活用していくかということは、今、言われた部分だけじゃなくて、身近なものをもうちよっと、普通に私どもはよく常々接していると気付かないというところがあるわけでありまして。この自然の豊かさについても、私どもは、どうしても信濃町に、ここに、昔から住んでいるものですから、当たり前前の自然として受け止めておりますけれども、やっぱり、ここに、素晴らしいエリアに生かされているという思いを改めて感じつつ、この信濃町の自然の豊かさ、あるいは、農産物のおいしさ等々を含めて、再認識をしていくということが必要なんじゃないかなど。今の根曲がり竹とか、山の山菜の関係についてはまた、すぐにというわけにはいかないというふうに思います。

●議長（小林幸雄） 石川議員。

◆5 番（石川広之） 山菜の件は、すぐにというわけにはいかない。でも、すぐに対応をしないと、荒廃地が、ただ荒れていくきりで、山菜に覆われるのなら、まだ有効価値があると。是非、対応は早い方がいいと、荒廃地になるんじゃないかと、農産物の遊休農地になるということですから、よろしくお願いします。山菜の価値を是非、また検討をよろしくお願いします。

ブランド、いろいろ聞きましたけれども、ブランドとは、誰が決めて、誰が手を上げて、誰がこれを認めてくれているのか。そういう所があるのか、誰でも「おらブランドだ」と言えばいいのか、自治体がここに関わっているのか、県に関わっているのか、国に関わっているのか、ブランドという言葉は、誰が認めてくれるのか、お聞きします。

●議長（小林幸雄） 横川町長。

■町長（横川正知） 一般的にブランドと言われているのは、それぞれの品目、あるいは、事象について、差別化が図られているということが、一般的に認識としては、そういうことだと思うんですが。具体的に、どういうふうな行動とするかということは、法律で問題となるんでしょうか、私もこの程度までしか言えませんが、一つはやっぱり商標登録だとか、というような具体的な方法として進めていくことが、ブランドというものを確固たるものにしていくと、こういうことになってくるんじゃないかと思えます。

●議長（小林幸雄） 石川議員。

◆5 番（石川広之） 今、町長が言われた、商標だとかというようなものと言われましたけれども、それぞれのいろいろな品目に対して商標を取る、あるいは、これはどうだこうだということ、大変お金がかかったり、期間もかかったりするものがあります。信濃町で、独自でもいいから、商標、ブランドだというような考え方であってもいいんじゃないかと。ただそれには、しっかりとした裏付け、ここ 1 年、2 年で終わるのではなくて、

長い間、しっかりとブランドとして継続できるものをある程度認定して、ブランドですよと、しっかりと売ってください、というような考え方の一つで、町としても、ブランドを与えるという言い方もないんですけども、ブランドというふうに認めますよと。県でも国でも、ブランドということで、認めている機関はない。ないなら、この信濃町の生産物あるいは名称に対して、ブランドであり得るものだということで、ブランド、と言ってしまうとまた違うのかな、ブランドであり得るもの、だということで、是非、町の活性化に向けても、農業者にしても、是非、ブランドという扱いをする、ブランドを認める組織づくりというのは、考えますか。

●議長（小林幸雄） 小林産業観光課長。

■産業観光課長（小林義之） 今現在、長野県では、県産地呼称管理制度というものを設けてまして、農産物の原料や栽培の方法、また飼育の方法、味覚による差別化を行いまして、その委員会の中での、その品目別の認定基準なども定める中で、そういうような認証の制度もありますので、それは今現在、生産者の方々が直に、県の方に申請をしてやるというような状況でございます。そのようなブランド化というような認証のマークを付けて販売ができるというような状況もありますし、ホームページの中でも、どういうものが認証を受けた物かというような形で、ホームページでも見られるような形となっております。

そんな中で、今現在、県の方でやっておりますので、町独自に、そういうような審査の方法など、大変専門的な知識も必要になりますので、そういう部分につきましては県の制度を利用していただければ、そういう部分での、生産者としての農産物の認定というような部分では、できるかと思っております。

●議長（小林幸雄） 石川議員。

◆5番（石川広之） どうしても、農産物というふうに見えちゃうのかな。そうじゃなくて、名称であったり、自然であったり、ずっと今日聞いている中では、農産物でなくても、ブランド化するものは、たくさんあると思います。それについて、じゃあ誰が、このブランドということを書いてくれるのか。町の傘下にしても、商標登録をして、どうだこうだじゃなくて、信濃町はしっかりとしたブランドですよと、あるいは、地名にしても、先ほども言ったように、もろこし街道と言うんなら、それは一つのブランドとして、町はブランドとして扱っていますという、そのような具合で、もう少し、大変さがないような、ブランドという扱いができるかどうかという検討も是非、農産物というふうに見ないで、是非お願いをしたいと思うんですが、町長、どうですか。

●議長（小林幸雄） 横川町長。

■町長（横川正知） 今、一般的に、自然とか、それに関連して、野尻湖も含めて、黒姫

山も含めて、このことを「信濃町のブランドの山・黒姫山」とか、そういうことであえて言うあれじゃないというふうに思うんです。差別化とか云々ということになりますと、そこにあること自体が、もう個別であり、差別化されているものでありますので、そういった意味では、まさにそのブランドとしての意味として、情報発信を観光的にもやったりしているのが、現状かなと思うんです。

ただ、今、農産物だけじゃないよとおっしゃるんですが、例えば、農産物でも、あるいは、もろこし街道だとか、地名だとか云々ということはともかくとして、個別な農産物について、モロコシが、信濃町のブランドですよということで、何か方法として、緩やかな対応として、そのことができるかどうかということは、ある面では大事なことかなと思うんですね。それは、県の取組の、その分野については、しっかりとした制度の中でやっている部分ですが、信濃町独自の産物等々も含めて、そういうことができるかどうかね。例えば、隣の中野市は、ポタゴショウ、ポタンゴショウと言っていますよね。同じ物を信濃町に来ると、ポタゴショウと言うわけです。これやっばり、こっちもポタゴショウだよということで、信濃町の特産品だということで、しっかりとブランド的な部分として、生産者も、そしてお客さんも認識できる、そんな取組は、どういう方法が取れるかというのは、ある面では、大事なことだと思います。

これは、すぐ云々というよりも、どういう体制でできるか、やっばりそのことが、作っている生産者の皆さんも、町民も、もう一つの自信にもつながってくるということだと思うんですね。極めて大事なことだろうというふうに思いますので、具体化できる方法も含めて、今後、検討する必要があるかなというふうに思っています。

●議長（小林幸雄） 石川議員。

◆5番（石川広之） ブランドに関して、町長、また町の考え、大変、方向性的には、いい方向へ向いているのかなと。またそれぞれ、これ遅れることなく、とかく余裕を持っていると、他市町村が先駆けてブランド化されたり、訳ありの商品にされます。是非、いろいろな組織を使ったり、人材を使って、是非、ブランドという言葉でなくてもいい、信濃町から発信できるものとして、育てていただければ、先ほども町長が言ったように、これから検討をし、また緩い面でもいいから、生産者、地元ブランドという言葉が根付くような、また信濃町から発信できるようなものに、是非していただきたいと思います。

以上で終わります。

●議長（小林幸雄） 以上で、石川議員の一般質問を終わります。

この際、申し上げます。昼食のため、午後1時まで休憩といたします。

(午前 11 時 40 分)